HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロマンス諸語における不定詞節内の代名詞クリティックの格照合
Author(s)	藤田, 健
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 112, 105-134
Issue Date	2004-02-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34064
Type	departmental bulletin paper
File Information	112_PL105-134.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 112 (2004)

ロマンス諸語における不定詞節内の代名詞クリティックの格照合

藤田　健

0. はじめに

ロマンス諸語には，他の多くのインド・ヨーロッパ語族（印欧語族）の言語と同様，動詞カテゴリーの一つとして不定詞が存在する。ロマンス諸語の多くの伝統文法においては，不定詞は他の法と対比させ不定法として扱われている。つまり，ロマンス諸語の多くにおいて，不定詞に関して直説法や接続法のような他の法範疇と同列の要素として共通の捉え方がなされているのである。

しかし，ロマンス諸語において，不定詞を中心として形成される節の統語的ステイタスがそれぞれに相異なることを示唆する現象が存在する。それは，目的語代名詞クリティック（以下，代名詞クリティック）の接語化に関わるものである。目的語代名詞クリティックとは，音韻的・統語的に自立して存在することができず，常に動詞に依存して生起する要素を指す。この要素は，全てのロマンス諸語に共通して存在するもので，ロマンス諸語と他の印欧語族の諸言語とを区別する，重要な形態・統語的特徴であると言える。

代名詞クリティックの統語的分布は，ロマンス諸語においてそれぞれ複雑であり，個々の事例に関して詳細に検討しなければならない。理論統語論の観点からは特に興味深い現象であり，従来，イタリア語・フランス語を中心として少なからず研究が行われてきた。この中で，本稿が扱うのは，代名詞クリティックが目的語として不定詞に依存する場合に，イタリア語・スペイ

ン語とフランス語との間に語順に関する相違が生ずるという現象である。本稿は，この現象が3言語における不定詞節の統語的ステイタスの違いを具現化したものであるという立場から，Chomsky (1995) において提唱されている最小主義プログラムの枠組みに基づいて分析する。3言語における不定詞節の統語的特性の相違を明らかにすることによって，それぞれの言語における代名詞クリティックの格照合のメカニズムを提示するのが目的である。

1．イタリア語・スペイン語・フランス語における代名詞クリティック

本節では，まずイタリア語・スペイン語・フランス語において共通に見られる代名詞クリティックに関する一般的特性について概観した後，両言語におけるクリティックの統語的分布を，定動詞文と不定詞節に分けて観察する。

1.1. 代名詞クリティックの特性

代名詞クリティックは全てのロマンス諸語に存在する特徴的な要素である。各言語において多少の差異はあるが，共通するのは直接目的語と間接目的語は必ずクリティックが存在するということである。以下に，イタリア語・スペイン語・フランス語のそれぞれの対格形クリティックの体系を示す。

(1)

		単数	複数
a．イタリア語	1人称	mi	ci
	2人称	ti	vi
	3人称	男性 lo　女性 la	男性 li　女性 le
b．スペイン語	1人称	me	nos
	2人称	te	os
	3人称	男性 lo(le)　女性 la	男性 los(les)　女性 las
c．フランス語	1人称	me	nous
	2人称	te	vous
	3人称	男性 le　女性 la	les

機能としては，既出の名詞句を照応的に指示するというのが基本的なものであるから，意味的には他言語における代名詞の機能と変わらない。これに対して，音韻的には自律的ではなく，必ず動詞に依存するという特性を持つ。このことを示す証拠として，独自の強勢をもつことができない，動詞との間に他の要素が介在することができない等の事実があげられる。以下に，イタリア語(2)，スペイン語(3)，フランス語(4)の例を示す。

(2) a. * LO vedo.[1]
(I) him see
b. * Lo non vedo.
(I) him not see

(3) a. * LO veo.
(I) him see
b. * Lo no veo.
(I) him not see

(4) a. *Je LE vois.
I him see
b. *Je le ne vois pas.
I him not see

このような事実から，代名詞クリティックは統語的には独立した語として統語構造に挿入された後，統語操作によって動詞に接語化されるという分析が一般的になされてきた。本稿も，この考え方を採用することとする。

1.2. 定動詞文における目的語クリティックの分布

直説法，接続法，条件法で現れる定動詞文における代名詞クリティックの統語的分布は，イタリア語・スペイン語・フランス語の3言語において全く

[1] 強勢を持っていることを表すために，ここでは大文字を用いることにする。

共通である。以下に示されるように，定動詞に前接されるのが文法的であり，後接された文は非文である。

(5) a. Giovanni la vede.
Giovanni her sees
b. *Giovanni vedela.
c. Gli telefonerò.[2]
(I) him will-telephone
d. *Telefonerògli.

(6) a. Tú lo sabías.
you it knew
b. *Tú sabíaslo.
c. Rita no le enseña la carta.
Rita not him (her) shows the letter
d. *Rita no enseñale la carta.

(7) a. Elle le mange.
she it eats
b. *Elle mange (-) le.
c. Je lui écrirai.
I him will-write
d. *Je écrirai (-) lui.

この事実から，定動詞文に関しては，少なくとも代名詞クリティックの分布という統語的観点からは，3言語間に差異は認められないということが言える。

---

[2] イタリア語・スペイン語は，他の多くのロマンス諸語と同様，主語の省略が可能ないわゆるプロドロップ言語である。これに対し，フランス語はロマンス諸語としては例外的に主語名詞句の生起が義務的である。本稿では，従来の分析に従って，主語が音韻的にゼロの文においては，主語位置に pro が生起すると考える。

1.3. 不定詞節における目的語クリティックの分布

定動詞文の場合とは異なり，不定詞節における目的語クリティックの分布を観察すると，興味深い対立が存在することがわかる。イタリア語・スペイン語においては，クリティックが不定詞に後続する語順が文法的で，不定詞に先行する語順は非文である。これに対し，フランス語においては，定動詞の場合と同様にクリティックは動詞に先行する語順が文法的であり，動詞に後続する語順は非文である。

(8) a. Maria vuole leggerlo[3,4].
Maria wants read-it

b. *Maria vuole lo leggere.

c. Puoi prenderlo.
(you) can take-it

d. *Puoi le prendere.

(9) a. José quiere hacerlo.
José wants do-it

b. *José quiere lo hacer.

c. Puedo comprarlo.
(I) can buy-it

d. *Puedo lo comprar.

(10) a. Pierre veut le manger.
Pierre wants it eat

b. *Pierre veut manger (-) le.

---

[3] イタリア語においては，不定詞にクリティックが後続する場合，形態規則によって，不定詞語尾のeが脱落する。

[4] イタリア語・スペイン語・フランス語においては，英語やドイツ語のように人間対非人間の対立が代名詞において体系化されておらず，性・数の対立のみが関与する。従って，男性を指示する場合と非人間の男性名詞を指示する場合では同じ形式が用いられる。

c．Tu peux le réparer.
you can it repair
d．*Tu peux réparer (-) le.

また，イタリア語・スペイン語では，不定詞節が定動詞の補語である場合，クリティックが不定詞に後続する語順に加えて，定動詞に先行する語順（以下では，クリティック繰り上げ現象）も定動詞の種類によっては可能である。逆に，フランス語においてはこの語順は許容されない。

(11) a．Maria lo vuole leggere.
it wants read
b． Lo puoi prendere.
(you) it can take
(12) a． Lo quiero hacer.
(I) it want do
b．Lo puedo comprar.
(I) it can buy
(13) a．*Pierre le veut manger.
it wants eat
b．*Tu le peux réparer.
you it can repair

このように，イタリア語・スペイン語とフランス語とでは，不定詞節のクリティックの分布が完全な相補分布をなすのである。

2．先行研究

従来，クリティックの統語的分布に関する研究は数多く存在するが，イタリア語・スペイン語とフランス語の不定詞節における分布の対立を分析した

ものとして，Kayne (1991) と Uriagereka (1995) が挙げられる。以下では，両者の分析を概観しつつ問題点を指摘する。

2.1. Kayne (1991)

Kayne (1991) は，様々なロマンス諸語におけるクリティックの分布に関して，動詞移動・不定詞補文の構造という問題と関係付けて論じている。イタリア語（スペイン語）とフランス語の不定詞節におけるクリティックの分布の差は，クリティックの統語的特性が両言語において異なっているのではなく，派生の結果，不定詞節において動詞の占める位置が異なるために生じると主張する。具体的には，イタリア語における構造が (14 a)，フランス語における構造が (14 b) となる。

(14) a．$...[V+Infn]_i...Cl_j+T...[_{Infn}\ t_i]...[_{VP}[_V\ t_V]t_j]$
b．$...T...Cl_i+[_{Infn}V+Infn]...[_{VP}[_V\ t_V]t_i]$

この構造で，Infn とは不定詞の接辞に対応する名詞的性質を持つ機能範疇である。Kayne は全てのクリティックは機能範疇の左側に付加されるという特性を持つと仮定をする。従って，イタリア語における不定詞へのクリティックの後接は動詞に付加しているのではなく，動詞に後続する機能範疇である T に付加される。イタリア語では不定詞が Infn を経由し，T を飛び越えて T' に付加されるのに対し，フランス語では不定詞が Infn に移動したままその位置に留まる。このため，イタリア語ではクリティックが動詞に後続するのに対し，フランス語では動詞に先行すると説明する。

両言語でクリティックの統語的特性が共通であるという捉え方は理論的に妥当であるが，この分析ではイタリア語において不定詞が T'まで上昇するのに対し，フランス語において Infn の位置に留まる理論的動機付けが明らかにされていない。また，イタリア語の分析ではクリティックが T に付加しており，統語的に V とは融合していないことになる。しかし，実際には動詞とクリティックは，書記上でも具現化されているように音韻的に 1 語を形成して

おり，統語的にも両者の間に要素が介入できないため，両者は統語部門で融合していると考えるべきである。

このように，Kayneの分析は，イタリア語とフランス語で不定詞節における統語的派生が異なるためにクリティックの統語的分布の差が生じるという総合的視点では妥当であるが，具体的な分析に関しては理論上・経験上問題点が残るものである。

2.2. Uriagereka (1995)

Uriagereka (1995) はスペイン語・ガリシア語・フランス語におけるクリティックの統語的分布を，Kayneとは異なった視点から統語構造を設定することによって分析している。スペイン語（イタリア語）とフランス語の不定詞節におけるクリティックの分布の差はクリティックの統語的特性の差ではなく，両言語における統語構造の差によるものであるという方針はKayneと共通している。

Uriagereka (1995) の分析において重要な点は二点ある。クリティックが形態的に定冠詞と同形であることから，3人称代名詞のクリティックがそれ自体でDPを構成するのではなく，proを補部として取る限定詞句DPの主要部の位置，すなわち通常の名詞句における定冠詞等の位置に生成されるという点と，スペイン語においては話者や補文の主語の視点を統語的にコード化する機能範疇Fが存在するのに対してフランス語ではそれが存在しないという点である。

以上の仮定を前提として，Uriagerekaは両言語のクリティックの分布の差を次のように説明する。限定詞である3人称クリティックは人称素性に関して指定されていないため，指示的に同一指標付けされる位置に移動しなければならない。スペイン語においてはその位置がFであり，このFとの統語的関係付けによって初めて補部であるproも認可される。そして，クリティックの移動のような「機能的編入」では，ロマンス諸語のように主要部先頭型言語においては要素が主要部に後続する編入のみが許されるため，クリティックがFに既に編入している動詞に後続すると説明する。

(15) $...[_{F}[...V...]Cl_{i}]...[_{VP}...[_{V}\ t_{V}]...[_{DP}\ t_{i}\ pro]]$

これに対して，フランス語ではFが存在しないため，Fに代わってDP内のproを認可する操作が必要となる。それは，クリティックのAGROへの移動とproのAGROP指定部への移動による「擬似目的語一致」であるとする。フランス語では，スペイン語と異なり動詞がAGROより下位にあるアスペクト主要部Asに留まっている。従って，クリティックが動詞に先行すると説明する。

(16) $...[_{AGROP}\ pro_{i}[_{AGRO}\ Cl_{j}][_{ASP}[_{As}\ V\ AS][_{VP}...[_{V}\ t_{V}][_{DP}\ t_{j}\ pro_{i}]]$

この分析は，Kayneの分析では明示されていないそれぞれの要素の顕在的移動の動機付けが明確に示されている点で理論的妥当性が高いと言えよう。しかし，話者の視点という通言語的に成立するはずの普遍的な概念に対応する機能範疇の存在自体に関して言語間で相違を認めるという点に問題点があると言える。この議論を説得的にするには，クリティックの語順に関する現象以外で，フランス語において機能範疇Fが存在しないことを示す経験的事実を提示しなければならない。

また，Kayneの分析とは逆に，この分析ではフランス語においてクリティックが動詞と統語的単位を構成していない。従って，やはりクリティックと動詞の間に他の要素が介在できないというクリティックの極めて重要な特性が捉えられていないという経験的問題点も残る。

このように，Kayne・Uriagerekaのいずれの分析も，理論的・経験的に問題点を残すものと言える。

3．分析

既に見たように，イタリア語・スペイン語・フランス語において，定動詞文においてクリティックの分布の差は存在しない。そこで，3言語における

クリティックを含む文の派生を，定動詞文から先に考察し，クリティックの統語的特徴を考察する。次に，3言語間で異なる不定詞節における目的語クリティックの分布の差がどのような要因によって生じるのかを，それぞれの言語の不定詞節の構造，及び統語的特性という観点から分析を進めていく。

3.1. 定動詞文におけるクリティック

1.2節で観察したように，定動詞文においては，イタリア語・スペイン語・フランス語いずれにおいてもクリティックは定動詞に先行する。

(5) a. Giovanni la vede.
her sees
b. *Giovanni vedela.

(6) a. Tú lo sabías.
you it knew
b. *Tú sabíaslo.

(7) a. Elle le mange.
she it eats
b. *Elle mange (-) le.

本稿では，Fujita (1999) の分析に従い，クリティックが次のような形態的特性を持つことから統語部門において動詞に付加されねばならないと考える。

(17) クリティックは，顕在構造において，(a)格照合し，(b)動詞要素と統語的複合動詞を形成しなければならない。

ここでいう動詞要素とは，Vもしくは Vを含む主要部という意味である。(17)の形態的条件は，クリティックという要素を統語的に特徴付けるものであり，ロマンス諸語の目的語代名詞はこの特徴を共有している。(17 a) の顕在構造における格照合は，フランス語とイタリア語において，次のように複合時制

において直接目的語クリティックと過去分詞が一致するという事実によって例証される[5]。

(18) a. Elle les a vus/*vu.
she them has seen-m.pl./-m.sg.
b. L'ho vista/*visto poco tempo fa.
(I) her have seen-f.sg./-m.sg. little time ago

ここで，なぜクリティックが顕在構造において格照合されねばならないかを考えてみよう。(18)に観察されるクリティックと過去分詞との一致は，何らかの形で統語的に認可されねばならない。この認可条件は，クリティックの持つ一致素性が動詞との一致によって照合されねばならないという条件であると考えることができる。この一致現象は顕現的なものなので，クリティックは顕在構造において vP 指定部に移動しこの一致素性を照合しなければならない。この一致素性の照合と同時に，目的語としての格素性も照合されると考えるのが自然である。(17 a)の条件はこのように動機付けられるのである。

では，定動詞文においてどのような派生によって上記のクリティックの形

---

[5] スペイン語においては一致現象が見られないが，これはスペイン語の過去分詞形が直接目的語との統語上の一致を具現化するという形態的特性を持っていないという形態的特徴によるものと考えることができる。1節で観察したように，イタリア語とスペイン語ではクリティックの統語的分布が全く等しいことから，本稿ではスペイン語もイタリア語・フランス語と同じクリティックの形態的特性を有していると考える。

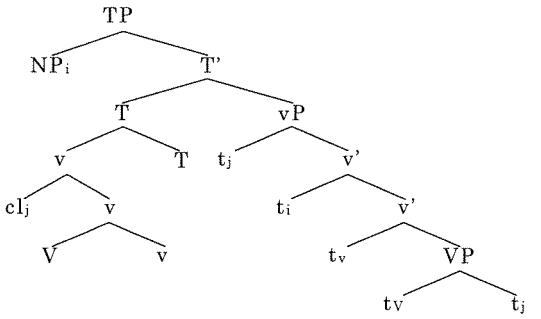
これは，スペイン語の過去分詞が統語的一致を具現化する特性を全く持っていないということではない。受動文において見られるように，主語名詞句との統語的一致は形態的に具現化される。

América fue descubierta por Colón.
America was discovered-f.sg. by Columbus

このように，スペイン語は統語的一致に関して主語名詞句の場合にのみ形態的に具現化されるという特性を持っていると考えられる。

態的条件が満たされるかを，直接目的語クリティックを例に見ていこう。本稿では，Chomsky（1995）において提示されている，他動詞句のVP殻（VP-shell）構造を採用する。クリティックは，目的語の位置であるVの補部の位置に生成される。上記（17 a）の条件を満たすため，VP殻構造の上位のvP指定部に移動し，主要部vと格照合を行う。次に，（17 b）の統語的複合という条件を満たすため，vP指定部の位置から最も近い上位の動詞であるvに付加する。以下に，顕在構造における派生を示す。

(19)



ここで，クリティックが定動詞に後接するのではなく，前接しなければならないのがなぜかを考えよう。Tは時制及び一致要素を担う主要部である。ロマンス諸語においては，以下のように，時制及び一致要素は動詞の屈折語尾という形態素によって具現化される。

(20)

a．イタリア語	parla-v-amo		fini-r-anno
	speak-半過去-1人称複数		finish-未来-3人称複数
b．スペイン語	hablá-b-amos		parti-r-án
	speak-半過去-1人称複数		leave-未来-3人称複数
c．フランス語	parl-i-ons		fini-r-ont
	speak-半過去-1人称複数		finish-未来-3人称複数

本稿では，動詞のそれぞれの語尾が統語部門における統語操作によって動詞語幹に付加されるのではなく，語彙部門において屈折語尾を含む動詞が形成され，統語部門に導入されると考える。その際，ロマンス諸語において具現化されるこれらの要素が，何らかの形で統語的に認可されねばならない。この認可がどのようにしてなされるかというと，動詞が上昇しTに編入した後に，動詞内の時制及び一致要素がTと照合されることにより認可されると考えるのが自然であろう。

このTとの照合の際に，vとTとが隣接していなければならないという線的な順序に関する形態条件が機能していると考えよう。すると，クリティックがvの右側に付加するとこの形態条件に抵触してしまう。逆に，vの左側に付加することによって自身の形態的条件を満たすのみならず，ロマンス語におけるvとTの隣接という形態的制約も満たすことになり，文法的な文となる。

このように，定動詞文においてクリティックが動詞に前接するのは，vとTの認可のための隣接という形態的条件によるものなのである。

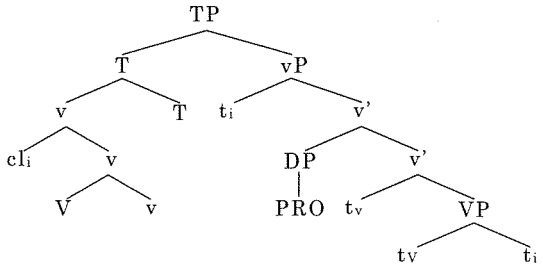
3.2. フランス語の不定詞節におけるクリティック

フランス語の不定詞節においては，定動詞文と同様にクリティックが動詞に前接する。従って，定動詞文の場合とまったく同様に，クリティックは不定詞のVP指定部において照合を受けた後，形態的特性を満たすため動詞要素であるT主要部に編入すると考えることができる。定動詞の場合と同じく，Tはvに隣接しなければならないならないという形態的特性を有するため，クリティックはvの左側に編入する。これにより，適切な文が生成されるのである。(21)に，不定詞節の部分のみの構造を示す。

このように，フランス語で定動詞文と不定詞節においてクリティックに関する派生は全く同じである。これは，両者の動詞としての統語的性質が全く同じであることによると考えることができる。この点は，フランス語の不定詞節でなぜクリティックが後接しないかという問題にも関わってくるのだが，詳細は，次節でイタリア語・スペイン語との対照という観点から議論す

ることとする。

(21)



3.3. イタリア語・スペイン語の不定詞節におけるクリティック

イタリア語・スペイン語の不定詞節においては，クリティックが動詞に後接するか上位の定動詞に前接するかのいずれかであり，フランス語のような不定詞への前接は非文である。このフランス語との違いは何に起因するのであろうか。本節では，不定詞への後接をまず分析し，それに基づいてクリティック繰上げ現象を考察していく。

3.3.1. 不定詞への後接

フランス語において可能な不定詞への前接がイタリア語・スペイン語において不可能な理由としてまず考えられるのは，両言語とフランス語ではクリティックの統語的特性が異なるという考え方である。しかし，この可能性は説得力に乏しい。定動詞文においてこれら3言語のクリティックの統語的位置に関する相違は存在しないため，不定詞節においてのみクリティックに関する特別な仮定が必要となってしまうからである。クリティックの統語的特性は同一であり，不定詞節という限定された環境において別の要因で統語的位置に関する分布の差が生じると考えるのが妥当である。

そこで，本稿では，両言語とフランス語において異なるのは，不定詞の統語的特性であるという観点から分析を進めていきたい。では，不定詞のどのような特性がこの相違の原因なのであろうか。この問題を考える上で重要な

のは，定動詞文においては3言語においてクリティックの統語的位置が同じなのであるから，定動詞の統語的特性に関してはこれらの言語に差がないという点である。

この点に留意しながら，クリティックの派生をもう一度考えてみよう。定動詞文においては，イタリア語・スペイン語共，クリティックがvP指定部において格照合を行った後に動詞に編入されるため，Tの形態的特性によって動詞の前に接語化されるのであった。すると，vP指定部に移動する前に，すなわち格照合される前に動詞に編入されれば，動詞に後接するということになる。既に示したように，そもそも動詞では時制・法形態素のような統語的接辞は語幹に後接される。従って，他に制約がなければ動詞への統語的編入は動詞の右側になされるのがこれらの言語の形態的特性であると言える[6]。実際，イタリア語・スペイン語両言語において，不定詞にクリティックが後接される場合，分ち書きをせず，動詞とクリティックが一語として綴られる。これに対して，定動詞文においてクリティックが前接する場合には，クリティックと動詞は分ち書きされ，別の語として綴られるという違いが存在する。

(22) a. farlo　　b. La conosco.
do-it　　(I) her know
c. comprenderlo　　d. La conozco.
understand-it　　(I) her know

この事実は単なる偶然ではなく，クリティックの接語化に関する，前接と後接の統語的性質の相違を反映していると考えることもできよう。

では，なぜ両言語で，不定詞節においてクリティックがvP指定部に移動す

[6] 本稿では，定動詞の場合と同様，不定詞の語尾は統語部門における操作によって動詞語幹に付加されるのではなく，語彙部門において不定詞として形成されたものがVとして統語部門に導入されると考える。従って，クリティックがVに編入する際に不定詞語尾の右側に生起するのである。

る前に動詞に編入されるのであろうか。これは，vP 指定部に移動しても，その移動の動機付けである格照合がなされないためであると考えてみよう。すると，格照合という動機付けが満たされない移動は行われず，もう一つの動詞要素への編入という形態的制約の要請によって，クリティックが VP 殻構造の下位の V に主要部移動することになる。そして，この V は v に上昇し，更にはこの v が T に上昇して動詞素性の一致が行われる。

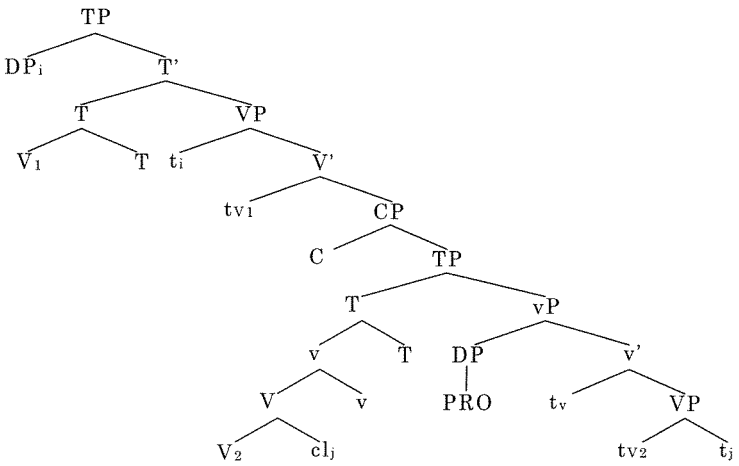
このように考えると，次に問題となってくるのは，なぜ不定詞節の vP 指定部においてクリティックの格照合が行なわれないかということである。これは，次のように考えることが出来る。イタリア語・スペイン語においては，フランス語と異なり，不定詞が格照合に対して潜在的能力を持ってはいるものの，それ自身のみでは目的語の格素性を実際に照合する機能を担えないのである。つまり，両言語においては，不定詞が目的語の格照合に関して不充分な機能しか持っておらず，自立的ではないということである。

しかし，目的語が格照合されなければ，解釈不能な要素として残ってしまい，いずれかの段階でその派生が破綻してしまう。特に，ロマンス諸語のクリティックは顕在構造において格照合されなければならないという通常の名詞句とは異なる特性を持っているため，格照合されなければ PF において解釈不能な要素となってしまう。では，イタリア語・スペイン語の不定詞節において，クリティックはどのようにして格照合されるのであろうか。

ここで，両言語においても，定動詞文ならばクリティックがフランス語の場合と変わらず格照合が可能であることを思い起こそう。これは，定動詞の持つ［+tense］という素性が関与していると考えることができる。すると，何らかの形で上位の定動詞のもつ［+tense］という素性が目的語名詞句と結び付けられることによって目的語名詞句の格照合が可能になると考えられる。具体的には，次のような派生になる。

不定詞の v は目的語クリティックを伴って自身の T まで上昇する。その T と上位にある定動詞の T との間の主要部一致によって，［+tense］という素性が T の主要部内に位置するクリティックと結び付けられ，v の格素性と共にクリティックの格照合が行われる[7]。(23)に，その派生を示す。この構造では，

(23)



T に隣接するのは v なので，3.1 節で述べた T の形態的条件には抵触せず，クリティックが動詞に後接しても文法的なのである。

3.3.2. クリティック繰り上げ

次に，クリティック繰上げ現象について考察しよう。以下のようなクリティック繰り上げ語順は，どのようにして生成されるのであろうか。

---

[7] 定動詞の場合と異なり，ここでは指定部への移動による指定部・主要部一致ではなく，主要部同士の一致を通して格照合が行われる。本稿では，このような格照合は有標な手段であると考える。顕在構造における名詞句の格照合は，主語名詞句の EPP 素性の照合に見られるように，移動により指定部と主要部との一致によって行われるのが無標の操作である。従って，クリティックの場合も vP の指定部に移動し，v との一致によって格照合が行われるのがまず選択されるオプションであると考えられる。

クリティックが不定詞に後接する場合は，不定詞の統語的性質からこの無標のオプションを選択することが不可能なので，T の主要部内における一致という有標のオプションが始めて可能となる。後に議論するクリティック繰り上げ構文においては，上位の定動詞において無標のオプションが選択される。

この有標・無標の対立は，理論的には顕在構造における格照合のための統語操作として，移動が主要部一致よりも経済的であることの反映であると考えることができる。

(11) a. Maria lo vuole leggere.
Maria it wants read

(12) a. Lo quiero hacer.
(I) it want do

この文の統語構造を考える上で重要なのは，不定詞の目的語があたかも上位の定動詞の目的語であるかのようにふるまっているということである。この現象に関して想起されるのは，英語におけるいわゆる例外的格付与構文である。

(24) People genuinely believed him to be innocent.

このような文では，補文の不定詞節の主語が上位の定動詞によって格照合される。イタリア語・スペイン語におけるクリティック繰上げ現象もこれと平行的に捉えることができる。つまり，補文のクリティックが上位の定動詞によって格照合されるのである[8]。

ここで問題となるのは，前節で議論した方法による格照合が行われ，クリティックが不定詞に後接するというオプションがなぜ取られないかということである。前節で議論した構造と，クリティック繰上げの場合とではっきりと異なるのは，名詞句の格照合を行う動詞である。後者では補文の不定詞であるのに対し，前者では上位の定動詞である。すると，この定動詞がもともと格照合可能かどうかという疑問が生ずるが，〝potere(〜できる)〟のような動詞は目的語を取る他動詞ではないので，格照合能力を持っているとは考えにくい。

そこで，本稿では，クリティック繰上げ構文においては上位の定動詞Vと

[8] 英語の例外的格付与構文と異なるのは，(11), (12)においては不定詞の主語としてPROが存在する点である。本稿では，PROがどのようにして認可されるかという点に関しては議論しないが，通常仮定されているように，PROを含む節はCPであると考える。

下位の不定詞のvとの間で主要部一致が行われ，上位の動詞に格照合能力が転送されると考えたい。この場合，下位の不定詞のvが格照合を行う必要が全くないので，クリティックが不定詞に後接する場合に行われた主節のTと補文の不定詞節のTとの主要部一致は行われないことになる。

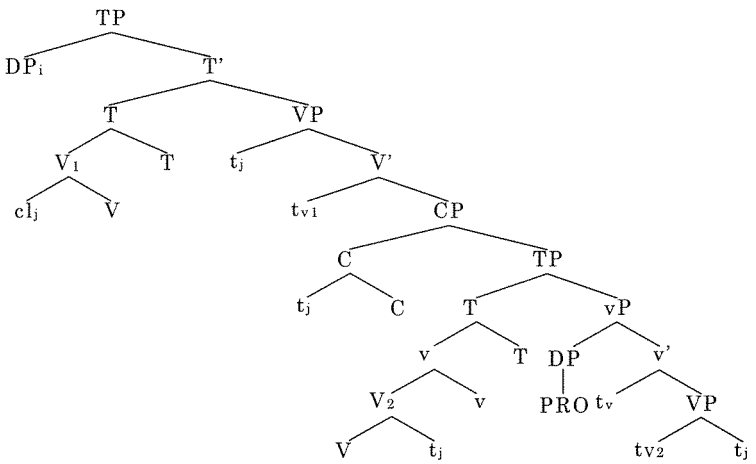
この考え方に則って，クリティックがどのように移動して主節の定動詞に前接するかを考えよう。定動詞文におけるように補文のvP指定部に最初に移動しても格照合が行われないという事情はクリティック繰上げの場合にも変わらないので，クリティックはまず不定詞のVに編入する。このVがvに上昇し，更にこのvがTに上昇する。ここまでは不定詞への後接の場合と全く同じである。この後，この位置に留まったままでは格照合がなされないので，クリティックは不定詞から外編入(excorporate)し，補文のCを経由して上位のVP指定部に移動する。不定詞との主要部一致によってこの定動詞は格照合能力を持っているので，このVP内においてクリティックの格照合が行われるのである。この後，形態的条件を満たすため定動詞へと編入する[9]。このVへの編入の際，クリティックがVの右側に編入すると既に述べたTに関する形態的制限により排除されてしまう。従って，クリティックはVの左側に編入し，前接するのである。(25)に，この派生を示す[10]。

---

[9] クリティックが主文の定動詞Vに直接移動せずに，補文のCを経由するのは，最小連結条件（Chomsky（1995）におけるMLC）を満たすためであると考える。

[10] この派生では，一旦不定詞に編入したクリティックが外編入し，上位の定動詞のVP指定部に移動した後，定動詞に編入している。複雑な移動を行っているが，最初の動詞への編入はあくまでも格照合を行うためにMLCを満たしながら上昇するためのものであり，動詞付加という形態的条件を満たすためのものではないと考えることができる。すると，いずれの移動も動機付けされたものであって，経済性に違反するものではない。

(25)



以上の考察に従うと，イタリア語・スペイン語において補文不定詞の目的語クリティックの統語的位置が2種類存在するのは，不定詞の目的語名詞句を照合するための方策として，主節と補文のT同士の主要部一致もしくは主節の定動詞Vと補文の不定詞のvとの主要部一致の二つの可能性が許され，そのいずれが選択されるかによってクリティックの格照合の方法が異なるためであると説明できる。

では，フランス語においてこの二つのオプションのいずれも選択されず，クリティックが定動詞文の場合と同様に不定詞に前接するのがなぜかを考えよう。既に議論したように，フランス語ではイタリア語・スペイン語と異なり，不定詞が他に依存せずに自律的に目的語の格照合を行うことができる。つまり，主節のTないしはVと不定詞のT，vとの間に主要部一致が行われることなしに格照合が行われるのである。従って，格照合のための主要部一致が経済性の原理から選択されないのは理論的に自然なことである。このため，イタリア語・スペイン語の不定詞節におけるオプションがフランス語においては選択されないと結論付けられる。

4．使役構文における不定詞

前節までは，明示的な主語を持たない不定詞補文をとる構文において，イタリア語・スペイン語とフランス語との間に存在するクリティックの統語的分布の差が，不定詞節の自律性に起因する目的語を格照合する能力の差によるものであると議論した。本節では，3言語において共通に見られる有標の不定詞補文構文である使役構文における目的語クリティックの統語的分布においても差異が存在することを観察し，その原因が前節までの議論で主張した仮説で簡潔に説明できることを示す。

4.1．使役構文の統語構造

イタリア語・スペイン語・フランス語には，明示的な主語を伴う不定詞補文構文が存在する。これは，英語の〝make〟に相当するイタリア語〝fare〟・スペイン語〝hacer〟・フランス語〝faire〟を本動詞とする使役構文である[11]。これらの動詞が用いられる使役構文で特徴的なのは，不定詞の主語すなわち被使役者名詞句の格標示が，補文の動詞が自動詞であるか他動詞であるかによって異なるという点である。前者の場合には対格，後者の場合には与格すなわち前置詞を伴った形式で生起するのである[12]。(26)がイタリア語，(27)がスペ

[11] これらの言語には，英語の〝let〟に相当する使役動詞でイタリア語〝lasciare〟・スペイン語〝dejar〟・フランス語〝laisser〟を用いる使役構文も存在する。これらの動詞を用いた構文では，本節で議論する有標の語順と，英語の使役構文（例外的格付与構文）に対応する通常の不定詞補文の語順の両方が可能である。また，本文で議論するスペイン語の〝hacer〟を用いる構文でも，無標の語順も可能である。これら無標の語順を持つ文の構造は，英語における例外的格付与構文の構造と共通するものと考え，本稿では議論をしない。また，〝lasciare〟タイプの使役構文における有標の語順を持つ文については，〝fare〟タイプの文と全く同じ構造を持つものと考える。

[12] 与格以外に，英語の〝by〟に相当するイタリア語〝da〟・スペイン語〝por〟・フランス語〝par〟によって標示される場合もある。これらの場合にも本文での以下の議論は適用されるので，議論の簡略化のため与格形の場合のみを考察の対象とする。

イン語，(28)がフランス語の例である[13]。

(26) a. La paula fece impallidire Maria.
the fear makes turn-pale
b. Maria fa riparare la macchina a Givanni.
makes repair the car to

(27) a. Los rayos del sol hacen crecer las plantas.
the rays of-the sun makes grow the plants
b. Hizo construir la casa a Leonardo.
(he/she) made construct the house to

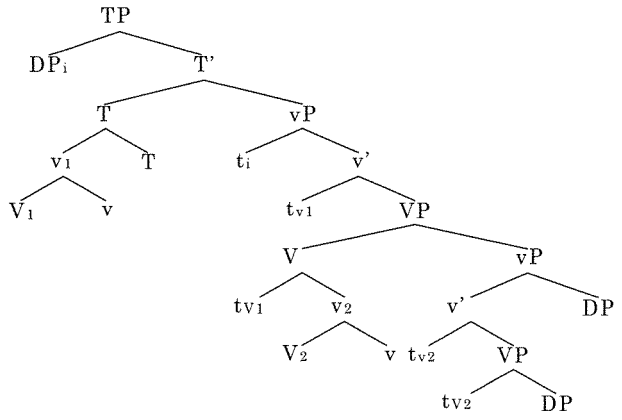
(28) a. Je fais venir ma sœur.
I make come my sister
b. Il fait taper la lettre à sa secrétaire.
he makes type the letter to his secretary

本稿で議論している目的語クリティックが関わってくるのは補文の動詞が他動詞の場合であるので，ここでは他動詞補文の場合に限ってこの構文の統語構造を考えていく。この使役構文の構造については，Fujita (1999) におけるフランス語の使役構文の分析に従い，1）補文がCPではなくvPであり，2）〝fare〟，〝hacer〟，〝faire〟は形態的特性として補文の動詞と統語的複合動詞を形成すると仮定する。この統語的複合動詞の形成によって生ずる統語的特性は，補文の動詞の補語である対格目的語が補文の動詞句内で格照合されず，上位の動詞句において照合がなされるという点である。これによって，補文の主語名詞句が上位の定動詞で対格として格照合されることが不可能となる。従って，使役動詞の語彙的特性により，これらの言語においては前置

[13] スペイン語では，直接目的語が（特に特定の）人間である場合，与格を標示する前置詞〝a〟によって標示されるという統語的特性が観察される。本稿では，議論の簡略化のためにこれらの現象を扱わず，議論を別の機会に譲ることとする。

詞で標示される与格として生起し，主節の動詞句内で格照合を受けるのである。(29)にイタリア語の例の顕在構造における統語構造を示す。この構造において，補文の動詞である不定詞は主節のVに上昇し統語的複合動詞を形成する。主節の定動詞はTでのEPP素性の照合のため，この複合動詞から外編入しvに移動する。このvがTに上昇することによって格照合が適切に行われる。補文の目的語の格照合については，補文がTを持たないために，フランス語を含めて格照合能力が自律的でないと考えられる。従って，主節のVとの統語的複合動詞形成を通じて，上位のvによって格照合が行われると考えることができる。このため，補文の対格目的語は上位のvと格照合されることになる。

(29)



4.2. 使役構文における代名詞クリティックの統語的分布

これらの使役構文において，不定詞の目的語がクリティックとして生起する場合，興味深い対立が観察される。3言語とも可能な共通の語順と，ある言語においては許されるのに対し，他の言語では許されないという語順の2種類が存在するのである。前者は，主文の定動詞にクリティックが前接する語順である。

(30) a. Maria la fa riparare a Givanni.
it makes repair to
b. La hizo construir a Leonardo.
(he/she) it made construct to
c. Il la fait taper à sa secrétaire.
he it makes type to his secretary

もう一つの語順は，クリティックが不定詞に後接するという明示的な主語を伴わない不定詞補文構文と同じ語順で，これはスペイン語において可能である。これに対し，イタリア語ではこの語順は容認度が下がり，フランス語では完全に非文である。

(31) a. ??Maria fa ripararla a Givanni.
makes repair-it to (Burzio (1986))
b. Hizo construirla a Leonardo.
(he/she) made construct-it to (Treviño (1991))
c. *Il fait taper (-) la à sa secrétaire.
he makes type-it to his secretary

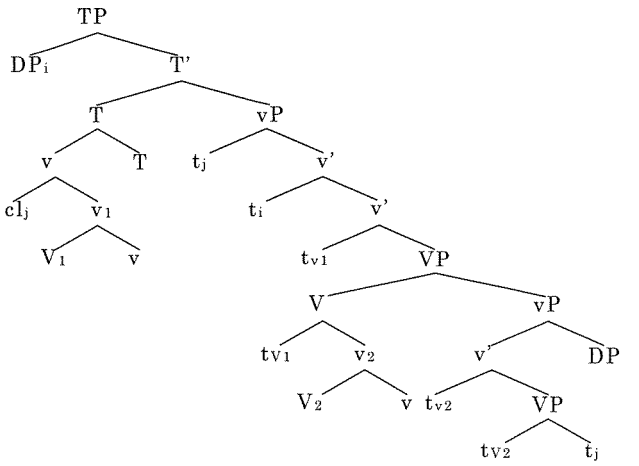
使役構文において，目的語クリティックの分布にこのような複雑な対立が見られるのはなぜであろうか。以下では，それぞれの文の派生を考えながら，分析をする。

4.2.1. 定動詞へのクリティックの前接

3言語に共通の，定動詞に前接する語順に関しては，クリティックが直接主節の vP 指定部に移動して格照合を受け，その後に定動詞に付加すると考えることができる。既に述べたように，使役構文においては補文の動詞である不定詞が定動詞である使役動詞に上昇し，統語的複合動詞を形成する。その段階で，複合動詞が統語的に一つの動詞として目的語の格照合をすること

になる。つまり，これは3.3.2節で議論したイタリア語・スペイン語における主節のvと補文のvとの主要部一致のかわりに，使役動詞の形態的条件によって動機付けられる不定詞の主要部移動によって，主節動詞句による補文の目的語の格照合という同じ効果が得られるということなのである。クリティックは，顕在構造においてvP指定部で格照合を受けるのが最も無標の操作なので，この派生が3言語においていずれも適格なのである。(32)にその派生を示す。

(32)



4.2.2. 不定詞へのクリティックの後接

クリティックの定動詞へ前接する語順は，定動詞と不定詞の統語的複合動詞形成による無標の操作の結果であることを見た。では，このような無標の操作が存在するにも関わらず，スペイン語においてなぜクリティックが不定詞に後接する語順が可能なのかという疑問が生じる。そしてこの疑問は，フランス語においてこの語順が非文であり，イタリア語において容認度が低いのはなぜなのかという問題にも関係するものである。ここでは，この語順について考えてみよう。

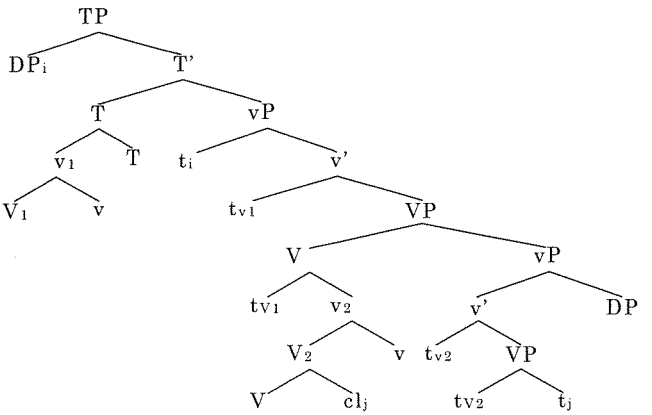
今までの議論でそのまま説明可能なのは，非文となるフランス語である。

フランス語においては，もともとクリティックはvP指定部において格照合を受けるオプションしか許されていないので，vP指定部に移動しないVへの後接という移動は選択されない。Vへの後接というのは，vP指定部における移動という無標の選択が許されない場合の派生であるからである。

では，スペイン語においてこの語順が文法的なのはなぜであろうか。この現象のみに基づいて，フランス語とスペイン語では使役構文の構造が異なると主張するのは難しい。クリティック以外にこれを支持する現象が必要であるからであるが，既に観察したように，クリティックが生起しない文においては，補文の主語及び目的語の統語的分布に関し両言語に相違はない。従って，使役構文それ自体の構造は，両言語において同じであると考えるのが妥当である。では，両言語におけるどのような相違がこの語順の文法性を差を生み出しているのであろうか。本稿は，使役動詞と不定詞からなる複合動詞の格照合に関する特性の違いに起因すると考えたい。

既に述べたように，使役構文の場合，3言語において不定詞のvの格照合能力は単独では不充分なものである。そこで，何らかの形で上位の定動詞要素との統語的操作により格照合能力を獲得しなければならない。その一つの方法が前節で議論したように，統語的複合動詞形成による複合動詞全体としての格照合である。もう一つの方法は，スペイン語において許される，複合動詞形成によって不定詞のvが主節のVから格照合能力を受け継ぐというものである。この操作により，通常の不定詞補文構文と全く同様にクリティックが不定詞のvの内部で格照合されることが可能となる。ただし，不定詞のvが格照合できるようになるのはあくまでも主節のVに編入した後である。従って，補文のvPがmergeされた段階では格照合がなされないので，vP指定部には移動せず，直接補文のVに編入し，主文のVと複合動詞が形成された段階でvとagreeによって格照合される。このため，不定詞に後接する語順が文法的となるのである。(33)にその派生を示す。スペイン語においては，クリティックの定動詞への前接語順の場合の複合動詞による格照合と，この複合動詞形成による不定詞の格照合が対等のオプションとして存在するため，そのいずれもが選択可能となるのである[14]。

(33)



最後に問題として残るのは，イタリア語におけるこの語順の容認性の低さである。フランス語と異なり全く非文というわけではないが，スペイン語ほど容認度が高くはない。これは，イタリア語においては，不定詞のvが主節のVから格照合能力を受け継ぐというオプションが有標の操作であるため，無標である複合動詞による目的語の格照合が優先されるためであると考えることができよう。

以上のように考察すると，3節で通常の不定詞補文構文について提案した本稿の主張で，使役構文に関して3言語に見られる目的語クリティックの統語的分布の対立を統一的な視点から説明することが可能となるのである。

5．結論

本稿は，イタリア語・スペイン語とフランス語において見られる不定詞節

---

[14] この不定詞のvと主節のTとの主要部一致が行われる場合には，統語的複合動詞内部において，補文の目的語の格照合能力の使役動詞への継承は行われないと考えられる。つまり，主要部一致が行われる場合には，統語的複合動詞において不定詞の独自性がある程度保たれるということが言える。

における目的語クリティックの分布が異なるという事実を，それぞれの言語においてクリティックの統語的特性が異なるという視点ではなく，不定詞節の統語的特性が異なるという視点から説明した。具体的には，フランス語の不定形動詞は目的語名詞句の格照合に関して定形動詞と全く同じように格照合能力を有する自律的な節を形成する。目的語クリティックが不定詞節内で格照合を受け，動詞に編入するにはvとTの隣接条件を満たすため，定動詞節の場合と同様に動詞に前接する。これに対して，イタリア語・スペイン語においては不定形動詞は独自に目的語名詞句の格照合を行うことはできず，格照合を行うためには自身のTが上位の定動詞のTと主要部一致し，[+tense]という素性を共有することが必要となる。このため，クリティックは直接不定詞のVに編入し，Vと共に補文のTまで繰り上がる。そして，Tの主要部一致を通じて格照合を受ける。定動詞の場合と異なり，クリティックがVに後接するという無標の編入が許されるのは，vとTの隣接条件に抵触しないことに起因すると説明される。

更に，3言語の使役構文における不定詞節のクリティックの分布についても，Fujita (1999) において仮定されている使役動詞に関する複合動詞形成という形態的特性を考慮することによって，いずれの言語においても許容される主動詞への前接という事実が説明される。更に，スペイン語において許容され，イタリア語においては有標である，不定詞への後接という現象も，複合動詞形成による主文のVから不定詞のvへの格照合能力の継承というオプションが可能であり，明示的な主語を伴わない不定詞補文の場合と全く同様のクリティックに関する派生が行われると説明される。

本稿が考察の対象とした3言語は同一の語派に属する言語で，統語的にも極めて多くの特徴を共有している。従って，これらの言語間で極端に異なる統語構造や統語的特性を有すると考えるのは理論的に妥当なものではないと言えよう。本稿の分析の利点は，クリティックの統語的特性や不定詞補文の構造という根本的な部分に関しては3言語間の相違を一切認めず，不定形動詞の格照合能力という動詞の統語的特性の一部に関してパラメーターを設定するのみで統一的な視点からクリティックの分布を説明できるという点であ

る。定動詞節のTと不定形動詞のvに関して仮定した主要部一致という統語操作も，冠詞と名詞の形態的一致現象のような他の多くの現象を説明できる一般的な性質のものである。

ロマンス諸語には，これら3言語とは異なる統語的特徴を持つ言語も存在する。ロマンス諸語において極めて特異な特徴を少なからず有する言語である，ポルトガル語の目的語クリティックの分布がその1例である。ポルトガル語の目的語クリティックの分布も本稿の仮定で分析可能であるかを検証するのが，今後の課題である。

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press, Chicago.

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax—A Government-Binding Approach—*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge.

— (2000), "Minimalist Inquiries: The Framework, In Roger Martin et al. (eds.) *Step by Step*, The MIT Press.

Cinque, Guglielmo (1995) *Italian syntax and Universal Grammar*, Cambridge University Press.

Franco, Jon (1991) "Spanish Object Clitics as Verbal Agreement Morphemes", In Jonathan bobaljik and Tony Bures (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics* 14.

Fujita, Takeshi (1999), "Les pronoms clitiques non-réfléchis en français", *Journal of the Linguistic Society of Japan* 115.

Goodall, Grant (1986) "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives", In Carol Neidle and Rafael A. Nunez Cedeno (eds.), *Studies in Romance Languages Foris Publications*, Dordrecht.

Guasti, Maria Teresa (1989) "Romance Infinitive Complements of Perception Verbs", In *MIT Working Papers in Linguistis* Vol.11, 31-45.

— (1996) "Semantic Restrictions in Romance Causatives and the Incorporation Approach", *Linguistic Inquiry* 27, 294-313.

— (1997) "Romance Causatives", In Liliane Haegeman (ed.), *The New Comparative Syntax*, Longman, New York.

Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris Publication, Dordrecht.

Jones, M.A. (1996), *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press.

Kayne, Richard S. (1977), *Syntaxe du Français*, Seuil, Paris.

—— (1991) "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO", *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.

Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction", *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP", *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.

Reed, Lisa (1990) "Adjunction, X^0 Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives", In T. green and S. Uziel (eds.), *MIT Workig Papers in Linguistics* Vol.12, 161-176.

Roberts, Ian (1997) *Comparative Syntax*, Arnold, New York.

Rosen, Sara Thomas (1989) "The Argument Structure and Phrasal Configuration of Romance Causatives", In *MIT Working Papers in Linguistis* Vol.11, 212-227.

Torrego, Esther (1998), *The Dependencies of Objects*, The MIT Press.

Uriagereka, Juan (1995) "Aspects of the Syntax of Clitic Placement in Western Romance", *Linguistic Inquiry* 26, 79-123.

Zubizarreta, Maria Luisa (1985) "The Relation between Morphophonology and Morphosyntax: The Case of Romance Causatives", *Linguistic Inquiry* 16, 247-289.

Zubizarreta, Maria Luisa (1986) "Le Statut Morpho-Syntaxique des Verbes Causatifs dans les Langues Romanes", In Ronat & Couquaux (eds.), *La Grammaire Modulaire*, éd Minuit, Paris.